

ミルクたっぷりの酒・ブクログ のバブー版ー歴史と戦争編

小野ユージン

第二次大戦後の3つの歴史観

現在先進国といわれている国々が過去に行った侵略や植民地支配、これらをどのように評価するかをめぐっては大きくわけて3つの歴史観がある。

1つ目は、第二次世界大戦の戦勝国が行った侵略や植民地支配は是認、黙認したまま、敗戦国の行った侵略や植民地支配のみを批判するもの。

戦勝国側の人間にこのような歴史観をもつ者が多いので、これを「戦勝国史観」と名付けておく。

日本の保守、右派系言論人の一部が「東京裁判史観」と呼んで批判している歴史観は、これとほぼ同じものだろう。

2つ目は、「戦勝国史観」の裏返しとなったもので敗戦国側の人間の主張する歴史観。戦勝国の行った侵略や植民地支配は批判しておきながら、自分たちの国の行ったそれは正当化するもの。

日本では、大東亜戦争＝アジア解放戦争説を主張する人たちがその典型だろう。

この歴史観を、「戦勝国史観」に対応させて「敗戦国史観」と名付けておく。

「歴史修正主義」と呼ばれ批判されている歴史観は、ほとんどがこの立場のものだろう。

また、日本ではこうした主張は「諸君」「正論」などの保守、右派系言論誌に多くみられたので、この歴史観の持ち主を便宜上「諸君正論派」と呼んでおく。

なお、日本の「敗戦国史観」の持ち主が、ドイツの「敗戦国史観」の持ち主の主張をどのように考えているのか、あるいはその逆はどうなのかは興味深いところである。

同じ敗戦国側の人間どうし、その主張に共感をもつのか、それとも自分たちの歴史観は正しいものだがドイツの（あるいは日本の）歴史観はまちがったものだと考えているのだろうか。

戦勝国側の「戦勝国史観」の持ち主は、敗戦国の行った侵略、植民地支配を批判しておきながら、自国の行った侵略や植民地支配は、近代化していない未開、野蛮な地域を近代化させることを目的とした正しい行為だったとしてこれを正当化する。

一方、日本の「敗戦国史観」の持ち主は、欧米諸国のアジア支配を批判しておきながら、日本の台湾や朝鮮の植民地支配は、この地域に近代化のためのインフラを整備したとしてこれを正当化する。

お互いに、自国の行為は正当化しておきながら他国の同じ行為は批判するという、自己中心的な考え方といえる。

（現在では、近代化していない国や地域を、そこを近代化させるという大義名分のもとに征服、支配すること自体が批判されるようになってきてはいるが。）

そして3つ目の歴史観であるが、これは戦勝国側が過去に行った侵略や植民地支配、これらをすべて批判するその延長線上で、敗戦国側の行った侵略や植民地支配を批判するというものである。

反帝国主義、反植民主義の価値観に基づいているので、「反帝国主義史観」「反植民主義史観」と名付けることにする。

なお、「諸君正論派」は戦後の日本で主流となった左翼系の歴史観を、敗戦国の人間の唱える「戦勝国史観」とみなし、これを「自虐史観」「東京裁判史観」と呼んで批判している。だが、左翼系の歴史観が「戦勝国史観」と同じものかどうかは、検証が必要であろう。左翼系の歴史観が、日本の行った戦争や植民地支配を厳しく批判しているのは事実だが、戦勝国側の行った侵略や植民地支配を是認あるいは黙認しているとはいえないだろう。実際には戦勝国側の行為も批判しているのだが、その声が日本の行為を批判する声よりも小さいものであるため、「諸君正論派」の目には「戦勝国史観」と同じであるようにみえているだけかもしれない。

あるいは、「戦勝国史観」と「反帝国主義史観」の中間に位置しているというのが妥当な解釈かもしれない。

私自身は3つ目の「反帝国主義史観」の立場である。

日本でも欧米でも左翼系の学者の中にはこの立場の人がいるが、一般的にはまだ少数派にすぎないのだろう。

敗戦国の日本ですら、自国の過去の行為を批判、否定することに対して根強い抵抗があるのだから、まして戦勝国側の人間が自国の過去の非道徳的な行為を反省し、批判するというのはなかなかできないことなのだろう。

日本近現代史をめぐる4つの歴史観

＜日清戦争・日露戦争＞を肯定的に評価するか否定的に評価するか、＜日中戦争・太平洋戦争＞を肯定的に評価するか否定的に評価するか、＜戦後の日本＞を肯定的に評価するか否定的に評価するか、以上の3点を軸にして、戦後の日本では大きく分けて4つの歴史観がみられる。

1つ目は、＜日清戦争・日露戦争＞＜日中戦争・太平洋戦争＞はともに肯定的に評価するが、＜戦後の日本＞は否定的に評価する歴史観。

これは、戦前の日本、大日本帝国を賛美し、戦後民主主義を批判する右翼の人たち、皇国史観の持ち主に特徴的な歴史観なので、便宜上＜皇国史観＞と呼ぶことにする。

2つ目は、＜日清戦争・日露戦争＞は肯定的に評価するが、＜日中戦争・太平洋戦争＞は否定的に評価し、そして＜戦後の日本＞も否定的に評価する歴史観。

これは、軍国主義化する以前の明治憲法体制の日本に郷愁を覚える人たちに多くみられる歴史観なので、＜明治伝統主義史観＞と呼んでおく。

「自由主義史観研究会」「新しい歴史教科書をつくる会」の関係者にはこの立場の者が多かったようである。

特に「新しい歴史教科書をつくる会」は、教科書を検定に合格させるための戦術であったのか、公的には日中戦争、太平洋戦争を肯定せず、＜皇国史観＞とのちがいをアピールしていた筈である。

(ただし、「自由主義史観研究会」「新しい歴史教科書をつくる会」関係者の中には＜皇国史観派＞も少なからずいたし、今世紀に入ってからでは日中戦争、太平洋戦争を肯定する発言をする人もめだってきてはいるが。)

3つ目の歴史観は、＜日清戦争・日露戦争＞を肯定的に評価し、＜日中戦争・太平洋戦争＞を否定的に評価する点では＜明治伝統主義史観＞と同じだが、＜戦後の日本＞は肯定的に評価するもの。

明治憲法体制から、軍国主義を経由せずに戦後の民主主義体制へと移行することを理想とする人たちに多くみられる歴史観なので＜リベラル・デモクラシイ史観＞と呼んでおく。

司馬史観と呼ばれている司馬遼太郎の歴史観はこれに近いだろう。また、日本人全体の中ではこの歴史観の持ち主が一番多いと思われる。

最後の4つ目のものは、＜日清戦争・日露戦争＞＜日中戦争・太平洋戦争＞をともに否定的に評価し、＜戦後の日本＞は肯定的に評価する歴史観。

明治政府当初の近代化路線は肯定するが、その後の帝国主義路線、海外拡張（膨張）路線は否定する考え方。

独立を保つための（自衛のための）必要最小限の軍事力のみを保有し、海外での戦争は極力避けようとする「小日本主義」に共感する人たち、反帝国主義、反植民地主義の左翼の人たちに多くみられる歴史観である。

この歴史観は、とりあえず＜反帝国主義史観＞と呼んでおく。

ただし、以上の分類は極めて大雑把なものにすぎない。

日清戦争と日露戦争、日中戦争と太平洋戦争をセットにして、それらを肯定するか否定するかとしたが、日中戦争は否定するが太平洋戦争は肯定する（あるいはその逆の）考えも当然あるだろう。

それに、それぞれの戦争に肯定的に評価できる要素と否定的に評価すべき要素があり、これらを全肯定するか全否定するかといった発想そのものへの批判も当然予想される。

また、＜皇国史観派＞＜明治伝統派＞は戦後の日本を否定的に評価しているとしたが、彼らが否定しているのは主に戦後憲法や戦後民主主義体制であり、戦後の経済成長路線は肯定的に評価している人が多い。

同様に、戦後の日本を肯定的に評価していると私がみなした＜リベラル・デモクラシー派＞＜反帝国主義派＞も、戦後の日本を全肯定している人ばかりではないだろう。

ここにあげた4つの歴史観は、戦後の思想言論空間の全体像を掴みやすくするために作りあげたステレオタイプの歴史観、一種の理念型にすぎない。

一人一人がもっている歴史観を細かく検証していけば、それは類型化できない複雑なものになるだろう。

○帝国主義路線肯定派の分類

＜皇国史観派＞＜明治伝統派＞＜リベラル・デモクラシー派＞は、19世紀後半の日本の帝国主義化を肯定している点で共通点があるが、その後の理想とする国家・社会のあり方をめぐって思想の相違がみられる。

＜皇国史観派＞＜明治伝統派＞は、戦後憲法・戦後民主主義体制を批判し、戦前の国家体制を擁護する右派・保守派といえる。＜明治伝統派＞は軍国主義化以前の体制を支持する穏健派で、＜皇国史観派＞は軍国主義時代の日本も肯定する極右系といえる。

＜明治伝統派＞と＜リベラル・デモクラシー派＞（以下＜デモクラシー派＞と略記）は、戦後民主主義への評価をめぐってちがいがあらわれる。

＜明治伝統派＞は軍国主義化以前の明治国家体制が継続することを望む人たちといえ、＜デモクラシー派＞は明治体制から軍国主義を経由せずに民主主義体制へと移行することを理想とする人たちといえる。

漸進主義的な改良での明治体制から民主主義体制への移行を望む保守派と、革命による民主主義化を志向する急進派とに分かれるだろう。

（前者は立憲君主主義者が、後者は共和主義者が多いと推察される。）

帝国主義路線肯定派は、日露戦争後の対外政策をめぐっても意見が分かれるだろう。

外国に侵略されないだけの国力を身につけたら、それ以上の海外進出は避けるべきと考え、韓国併合や中国大陸進出に否定的な小日本主義に近い立場。

韓国併合や中国での権益確保は肯定するが、1930年代以降の軍国主義路線には否定的な立場。

1930年代以降の軍国主義路線も肯定する立場（＜皇国史観派＞に相当するだろう）。

＜デモクラシー派＞と＜明治伝統派＞は、それぞれの中に海外進出批判派と韓国併合、大陸進出

肯定派がいると思われる。だが、＜デモクラシイ派＞は海外進出批判派が、＜明治伝統派＞は大陸進出肯定派が多いかもしれない。

○反帝国主義派と帝国主義肯定派の対立

90年代後半の自由主義史観研究会、新しい歴史教科書をつくる会と左翼系の歴史学者、歴史教育者との論争は、表層的には日中戦争、太平洋戦争（あるいは軍国主義時代の日本）の評価をめぐるで行われていたように見えるが、深層的には日清戦争、日露戦争（あるいは日本の帝国主義化）の評価をめぐるの対立といえるだろう。

前者は、日清戦争、日露戦争の勝利を、日本が欧米列強の仲間入りを果たした誇るべき国家、民族の歴史と考え、後者はこれらをその後の軍国主義化をもたらした否定すべきものと考えているのだろう。

日清戦争、日露戦争を肯定的に評価している人たちは、「新しい歴史教科書」を積極的に支持はしなくても、これに比較的寛容な態度をとっている人が多い。一方、＜反帝国主義派＞は「つくる会」の言動を厳しく批判していた。

日清戦争、日露戦争肯定派と＜反帝国主義派＞との対立は、福沢諭吉の評価をめぐるでもみられる。左翼系の学者の中には、日清戦争とその後の台湾の植民地支配を肯定的に評価した福沢諭吉を、帝国主義者、植民地主義者とみなして厳しく非難している人がいる。福沢諭吉が韓国併合以降の対外政策を支持したのなら、植民地主義者とみなせるだろう。だが、日露戦争時既に死亡していた福沢諭吉を、対外膨張主義者と同列にみなせるかは微妙なところだろう。

○個人的見解

私自身は、現在先進国とよばれている国が過去に行った侵略行為や植民地支配、これらをすべて批判するその延長線上で日本の行った戦争や植民地支配を批判すべきであると考えている。だから当然、＜反帝国主義史観＞に近い考えをもっている。

だが、当時の政治指導者や財界人など、日本社会に大きな影響力をもつ人たちの多くが帝国主義路線を支持していただろうから、現実には日本が反帝国主義路線をとることは不可能であっただろう。

当時の国民、一般大衆がどちらの路線を支持していたか正確なことはわからないが、おそらく国民の多数派は日本が欧米列強の仲間入りすることを肯定的に評価していただろう。帝国主義路線を支持する国民と支持しない国民が半々であったとしても、政府の方針に大きな影響を及ぼすことはできなかつただろうから、やはり現実の歴史が反帝国主義路線になることはなかつたであろう。

なお、日清戦争、日露戦争を経て欧米列強に伍す国力をつけたから日本は独立を保てたのであって、もし両戦争を行わず反帝国主義的な政策をとっていたら、日本は外国の支配下、従属下におかれてしまった筈だ、と主張する人たちもいる。

このような主張が妥当であるかは十分な検証が必要であるが、もしそうになっていたのだとしたら、反帝国主義路線ではなく、帝国主義路線をとったことがよかつたといえるかもしれない。

(少なくとも日露戦争までの時期に限っては。)

だが、反帝国主義路線をとっていても独立を保つことができ、地道な経済発展、漸進的な民主主義化を進めることができたのなら、その方がよかったといえるだろう。(特に、日露戦争の一応の勝利が、その後の韓国併合、対外膨張路線へと必然的に結びつき、満州事変から太平洋戦争へとつながっていったのだとしたら。)

○日本の民主主義化をめぐる

<デモクラシイ派>と<反帝国主義派>は、日清戦争、日露戦争の評価をめぐるでは意見が分かれるが、戦後の民主主義体制を肯定的に評価する点では共通点をもつ。

(韓国併合以降の海外膨張路線に批判的な点でも共通点をもつだろう。)

民主主義者、リベラリストにとっては、侵略はせず侵略もされずという方針を貫き、占領軍の力ではなく日本人自身の手で現在と同様の憲法、政治制度を作り出すことが理想だったといえる。

日本が日中戦争、太平洋戦争を行わなかったらどうなっていたかについては、いくつかの考え方があるだろう。

1つ目は戦前の国家体制が現在まで継続したとするもの。

<皇国史観派><明治伝統派>にとってはこれが理想だったといえるだろう。

2つ目は、漸進主義的な改良が行われ明治憲法と戦後憲法との中間的な体制に移行していたとするもの。

戦後憲法、戦後民主主義体制は占領軍の力があつたから実現できたのであり、日本人自身の力ではそのような体制は作れなかったという考え方でもある。

3つ目は、アメリカに占領されなくても遅かれ早かれ現在と同じような憲法、政治体制に移行していただろうとするもの。

私自身の考えは2つ目のものである。

私同様、日本人自身の力では戦後憲法、戦後民主主義体制を作りだせなかつただろうと考えている人の中には、逆説的な形で太平洋戦争を肯定している人もいるかもしれない。

「連合国相手に勝ち目のない戦いをしたからこそ、占領され民主主義的な憲法、政治制度がもたらされたのだ。もし太平洋戦争を行わなかったら明治体制がいつまでも続くことになつただろう。だから太平洋戦争をしてよかつたのだ。」と。

侵略戦争と自衛戦争

日本が1930年代から40年代にかけて行った戦争に対しては、それが自衛戦争だったのか侵略戦争だったのかをめぐって論争が繰り広げられてきた。

だが、自衛戦争と侵略戦争をどのように定義するかについて共通した理解がないため、両者の議論がかみあわないことがままある。

自衛戦争か侵略戦争かを論じるさいには、戦争の目的（自衛を目的とした戦争だったのか、侵略を目的とした戦争だったのか）と行為（自衛行為だったのか侵略行為だったのか）について認識を明確にしてから論じるべきだろう。

戦争を目的と行為によって分類すると、次の3つのパターンが考えられる。

- 1 侵略を目的とした侵略行為としての戦争
- 2 自衛を目的とした侵略行為としての戦争
- 3 自衛を目的とした自衛行為としての戦争

日本の行った戦争を自衛戦争だと主張する人は、2のパターンと3のパターンどちらと認識しているのか、一方侵略戦争だと主張する人は、1のパターンと2のパターンどちらと認識しているのかを明確にすべきだろう。

日中戦争または太平洋戦争を、自衛を目的とした侵略行為としての戦争であると認識している人たちが、一方はこれを自衛戦争だとして擁護、正当化し、もう一方は侵略戦争だとして批判しているケースがみられる。

戦争への評価に関しては、大多数の人は侵略戦争を否定すべきものとみなし、自衛戦争は肯定できるもの、あるいはやむをえないものとみなしている。

侵略戦争か自衛戦争かといった論争も、日本の行った戦争を肯定したい人たちがこれを正当化するために自衛戦争だと主張し、否定したい人たちが侵略戦争だと非難しているのが実態といえるだろう。

だが、極少数の人は自衛戦争であってもやってはいけない、侵略戦争であってもやってよいと考えている。

○侵略と自衛の定義

次に、侵略を目的とした戦争とはどのようなものか、自衛を目的とした戦争とはどのようなものなのかについて考察してみたい。

侵略を目的とした戦争が領土の獲得を目的としたものであることについては、異論は少ないであろう。

また、自衛を目的とした戦争が、他国から武力攻撃をうけた際にこれに対する戦争であることについても異論は少ないだろう。

意見がわかれるのは、経済危機を脱するために他国の資源、食糧を奪うことを目的とした戦争の場合だろう。

何もしなければ国民が生存できなくなるおそれもあるのだから、この場合は自衛目的だと考える人もいれば、国民の生活を救うことが目的であったとしても、他国の資源や食糧を奪おうとするのだから侵略目的だと考える人もいるだろう。

続いて侵略行為と自衛行為のちがいであるが、自衛行為に関しては目的の時と同様、他国から武力攻撃を受けた際にこれに対して戦う場合は自衛行為といえるだろう。

(私はこのケース以外に自衛行為といえる戦争は思いつかないが、日本の行った戦争が自衛行為の戦争だったと主張する人がいるのならば、なぜ自衛行為だといえるのか説明してほしいものである。)

一方、侵略行為といえるのは他国を不当に武力攻撃した場合、他国の領土内の資源、食糧などを奪いとった場合だろう。

(なお、目的の場合も行為の場合も自衛の概念を拡大解釈していけば、どのような戦争も自衛戦争だといって正当化できてしまうだろう。)

○日中戦争・太平洋戦争の評価

日中戦争、太平洋戦争に対しては、これを、侵略を目的とした侵略行為としての戦争とみなす人と、自衛を目的とした侵略行為としての戦争とみなす人がいる。

この場合、戦争の目的を自衛とみなすことの妥当性がまず問われる。

経済危機を脱するために他国の領土を侵犯することを自衛だと強弁できるのなら、自衛目的とみなすことはできるだろう。

だが、自衛目的の戦争であったとしても、では経済危機を脱するためなら他国の領土内の資源や食糧を奪いとってもいいのかという問題が生じる。

日本の行った戦争を肯定している人は、目的が自衛なら侵略行為をしてもよいと考え、否定している人は自衛目的であっても侵略行為はすべきでないと考えているといえるだろう。

私自身は、太平洋戦争は自衛目的の侵略行為と解釈することも可能だが、日中戦争は侵略目的の侵略行為とみなすことが妥当であると考え。

ただ私は、他国から武力攻撃を受けた際にこれに対して行う戦争以外は否定する立場をとっているので、太平洋戦争が侵略戦争ではなく自衛戦争であったとしても、これは肯定できないと考えている。

ただし、経済を維持するのに必要な資源、食糧の大半を輸入に頼っている日本は、1930年代と同じような状況におちいれば、その危機を軍事力の行使によって乗り切るか、それとも不当な軍事力は行使せず、危機的状況が過ぎ去るのを座して待つかという究極の選択をせまられることになるだろう。

だから、この問題を単に過去の歴史認識の問題としてすますことはできないといえるだろう。

大東亜戦争＝アジア解放戦争論の欺瞞

太平洋戦争あるいは大東亜戦争という名で呼ばれている戦争。

日本の戦争指導者たちが、欧米諸国に植民地支配されているアジアの人々を、その支配から解放することを一番の目的として戦争を行ったのであれば、私はその戦争を肯定はしないけれども否定もしない。

だが、私が太平洋戦争、大東亜戦争という名で呼ばれている戦争を肯定できないのは、日本の戦争指導者たちがその戦争を行った一番の要因が、経済危機を脱するために、欧米諸国に植民地支配されている地域の資源を奪いとることにあったことが明白だからである。

自国の利益のために、他国の支配下にある資源を奪いとりながら、その戦争をアジアの人々の解放のための戦争だと言い募るのは、二重の欺瞞であろう。

(だからといって、欧米諸国による東南アジアやインドの植民地支配が正しいわけではないが。)

日本人の多くが貧困に喘ぐ中、よその国の人々の解放のために多くの日本人の命を犠牲にして戦うほど、日本の戦争指導者たちが博愛に満ちた人物であったとはとても思えない。

だが、大東亜戦争を肯定している人々は、アジア諸国を解放するその代償として、その地域の資源を貰おうとしただけなのだと考えているのかもしれない。

もし、日本の行った戦争がアジア解放戦争だというのであれば、その戦争は以下のような手順を踏む必要があっただろう。

まず第一に、日本が植民地支配している台湾や朝鮮を解放する。

その地に独立後できた政権が、日本と共に他のアジア地域の解放戦争に参加するのであれば一緒に戦う。(独立後できた政府が満州国のような傀儡政権であるならば、真の解放とはいえないだろう。また満州地域も当然中国側に返すべきだろう。)

次に、いついつまでにアジアの植民地を放棄せよ、さもなければアジア地域の独立を目的として戦争を仕掛ける、と欧米諸国に対して事前通告すべきである。

そして、東南アジアやインドの独立運動家たちと協力して戦争を遂行すべきであろう。(なお、独立戦争を行うかどうかは、本来植民地支配されている国の人たちが決めるべきことである。独立戦争がおきた後、要請をうけてこれに介入するのならともかく、解放戦争と称して勝手に武力攻撃することは不当な行為であろう。)

また、欧米諸国が植民地を放棄したならば、その地には日本の傀儡政権ではなく自立した政権が樹立されるべきだろう。

そして、その政権が日本と共に他の地域の独立戦争に参加するのであれば、協力して戦うべきだろう。

もっとも、日本の行った戦争を肯定している人たちは、最終的に日本が勝利を収めたならば、その時点で東南アジア地域のみならず台湾や朝鮮の独立も承認するつもりだったのだ、などと虫のいいことを考えているのかもしれない。

いずれにせよ、大東亜戦争がアジア解放戦争だったのだという主張は、日本が戦争に負けたからこそ言える主張であり、もし日本が戦争に勝っていたならば、東南アジアの国々は日本を相手に独立戦争を戦うことになっていただろう。

だが、皮肉な話ではあるが、もし日本が太平洋戦争、大東亜戦争と呼ばれている戦争を行っていなかったならば、日本や欧米諸国に植民地支配されていた国や地域の独立は、実際より何十年も遅れることになったであろう。

もし、日本が中国での戦争から早々に手を引き、ドイツやイタリアと同盟を結ばず、ヨーロッパでおきたであろう枢軸国と連合国との戦争に、中立の立場をとるか連合国側で参戦していたら

。ヨーロッパでの戦争は史実通り連合国側が勝利していただろうから、1945年の時点で台湾や朝鮮が日本の植民地支配から解放されることはなかったであろう。

そして、台湾や朝鮮、東南アジアなどで独立戦争がおきた時には、日本と欧米諸国が協力してこれらの鎮圧にあたったかもしれない。

あるいはこれらの地域で東側陣営と西側陣営の覇権争いがおこったかもしれないし、場合によっては日本も含めた三つ巴の戦いがおこったかもしれない。

大東亜戦争肯定論者たちは、「だから日本の行った戦争は、（結果的に）アジア解放戦争だったのだ。」と声高々に主張しているのかもしれない。

第一次世界大戦は暴力団同士の縄張り争い。第二次世界大戦は、老舗の暴力団の縄張りを、新興勢力の暴力団が奪いとりとうとして、それに失敗した争い。

新興勢力の暴力団は、老舗の暴力団に支配されている住民たちを、その支配から解放すると偽って自らの行為を正当化した。一方、抗争に勝利した老舗の暴力団は、自分たちも暴力団であることを忘れ、警察気取りで新興勢力の暴力団を裁き、再び住民たちを支配しようとした。

日本は、清、ロシアという二つの旧勢力との抗争に勝利して、世界に冠たる暴力団勢力の仲間入りを果たしたといえる。

現在、先進国と呼ばれている国に住む国民たちは、自国の利益になることなら、なんでも支持をする低モラルのくせに、自意識、自尊心だけは人一倍つよい。だから、自国を暴力団呼ばわりするこの言説に対しても、ヒステリックな反発をすることが目にみえている。

もう何年も前になるが、佐高信が大手銀行の頭取連中は、暴力団の幹部よりもたちが悪いといった趣旨の発言をしたことがあった。銀行の利益をあげるために、暴力団さながらの手口を用いていたことを批判した発言だった。

暴力団と呼ばれている人たちは、自分たちが反社会的勢力とみなされていることを意識しているから、変なエリート意識はもっていないだろう。だが、大手銀行の経営陣は、自分たちは社会的エリートだという自意識、プライドをもっているから、自分たちを暴力団呼ばわりする発言には、ヒステリックな反発をしめすだろう。やっていることは暴力団と同じなのに、エリート意識とプライドだけは高い人間、これほどたちの悪い人種はいないだろう。

(ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年7月29日公開)

「大東亜戦争」と「太平洋戦争」の呼称をめぐって

日本が1940年代に連合国と行った戦争に対しては「太平洋戦争」と「大東亜戦争」という2つの呼称がある（数年前に岩波書店から出版された本では「アジア太平洋戦争」という言葉が使われ、学者の中にはこの呼称を使っている人もいるが、一般には浸透していない）。

「太平洋戦争」という呼び方に否定的な人は、おおざっぱにわけると2種類いる。1つは、アメリカの占領政策に批判的な考えをもっている人。「太平洋戦争」という呼称自体が、元々はアメリカの占領政策の一環として日本人に強要されたものらしいので、反米感情をもつ人やアメリカへの従属状態を脱したいと考えている人の中には、「太平洋戦争」という言葉を使うことを拒否している人が多い。

もう1つは、日本の行った戦争を肯定している人たち、あるいは軍国主義時代の日本に肯定的な感情を抱いている人たち。この2つは矛盾するものではなく、「太平洋戦争」という呼び方を否定して「大東亜戦争」という言葉を使用している人たちには、上記2つの考えを両方もっている人が多い。

一方、「太平洋戦争」という言葉を使っている人は、「大東亜戦争」という言葉に軍国主義的なイメージを感じ、それへの嫌悪感から「太平洋戦争」という言葉を使っている人が多い。

といっても、1940年代から60年代にかけて、この2つの言葉がどのようなイメージをともなって使われていたのかは知らない。だが少なくとも、私が小学生になった70年代には、「大東亜戦争」という言葉は、日本の行った戦争や軍国主義時代の日本を肯定・讃美している極右・国粋主義者たちが使用している」という印象がよかったので、多くのリベラルな思想や価値観をもっている人たちは、この言葉に対して拒否感や嫌悪感をもっていた。

右派の中には、「戦後の日本人は、アメリカに洗脳されたから大東亜戦争」という言葉を使っている」と主張している人も少なからずいるが、実際には日本の行った戦争や戦前の日本を擁護している人たちが「大東亜戦争」という呼称を使っていたので、その言葉が使用されなくなっただけだろう（少なくとも70年代以降に関しては）。

「アメリカの占領政策を肯定するか否定するか」「日本の行った戦争を肯定するか否定するか」「大東亜戦争」と「太平洋戦争」、どちらの呼称を使うか」という観点から、いくつかのタイプに分類できる。

*注意 ここで言っている「アメリカの占領政策を肯定するか否定するか」とは、占領政策全般ではなく、「太平洋戦争という呼称を強制した政策」に限定しています。

- 1・太平洋戦争使用派－「アメリカの占領政策を肯定」「日本の行った戦争を否定」
- 2・太平洋戦争使用派－「アメリカの占領政策を否定」「日本の行った戦争を否定」
- 3・大東亜戦争使用派－「アメリカの占領政策を否定」「日本の行った戦争を否定もしくは肯定しない」
- 4・大東亜戦争使用派－「アメリカの占領政策を否定」「日本の行った戦争を肯定」

1970年代以降、大多数の日本人は1か2の立場から「太平洋戦争」という言葉を使用してきた。そして右派・保守派の一部（または多く）が4の立場に立って「大東亜戦争」という言葉を使用してきたと言える。

呉智英などは、「戦争への評価と、（太平洋戦争・大東亜戦争の）言葉の使用は分けて考えるべきだ。」という考えのもと、「大東亜戦争」という言葉を使い続けてきた極少数派の人といえる。（「大東亜戦争」という言葉を使用している理由が、「太平洋戦争」という呼称を強制したアメリカ」への批判的な考えからなのか、それとも別に理由があるのかはよく知らない。）

なお、新書館から発行された『日本思想史ハンドブック』の中でも、3の立場から「大東亜戦争」という言葉が使用されていたから、徐々にではあるが3の立場の人が増えてきているのかもしれない。

冒頭でふれた「アジア太平洋戦争」という呼称も、「太平洋戦争」という呼称を強制したアメリカの姿勢」には否定的だが「大東亜戦争」という言葉は使いたくない、そのために「太平洋戦争」でも「大東亜戦争」でもない呼称を使っているのではないかという気もするが、正確なことはわかりません。

ちなみに自分自身は2の立場から「太平洋戦争」という言葉を使用している。「太平洋戦争」という言葉の使用をアメリカに強要されたことに反発する感情も理解できなくはないが、「大東亜戦争」という言葉には戦前の国家主義や軍国主義の匂いがぶんぶんと染みついているような気がして（特別な場合を除いては）使用する気になれない。

（ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年8月31日公開）

太平洋戦争とイラク戦争

太平洋戦争に対しては、これをアジアの解放戦争だといって肯定している意見と、侵略戦争だと批判している意見がある。イラク戦争に対しても、フセインの専制政治から民衆を解放した戦争だと肯定する意見と、侵略戦争だと批判する意見がある。2つの戦争に対する評価は、4つのタイプがある。

1・太平洋戦争、イラク戦争をともに否定する主張

戦争の口実・大義名分にかかわらず、先制攻撃した側を批判する考え。「目的が正しければ先制攻撃も容認される」という考えを否定する考え。

2・太平洋戦争は否定し、イラク戦争は肯定する主張

2007年頃の『論座』で、読売新聞社の渡邊恒雄がこのような主張をしていた。渡邊氏の意見で興味深かったのは、太平洋戦争を、（イラク戦争同様）連合国による日本の民衆の解放戦争だととらえていた点である。

民主主義国家と独裁国家の戦争では、どちらが武力攻撃を仕掛けたのかには関係なく民主主義国家側が正しいという考えで、その主張に賛同するかはともかく、論理的な一貫性だけはある。

太平洋戦争が、日本側から仕掛けた戦争ではなく、連合国側から仕掛けた戦争であったとしても、渡邊氏は連合国側が正しいと思ったのだろうか。

3・太平洋戦争、イラク戦争をともに肯定する主張

ネット検索をしていて偶然訪問したサイトで、このような主張をみかけた。管理人は右翼的な思想の持ち主らしかったが、日本も正しい、アメリカも正しいという考えで、「親米右翼」的な立場だとこのような考えになるのだろうか？

大義名分に正当性があれば、他国を武力攻撃してもいいという考えで、太平洋戦争・イラク戦争の大義名分はともに正当性があるという考えらしい。

4・太平洋戦争は肯定し、イラク戦争は否定する主張

「反米右翼」的な立場の人にこうした主張がみられた。日本は「アジア開放戦争だ、自衛戦争だ」と勝手な大義名分を掲げて他国を武力攻撃してもいいが、アメリカが同じことをするのは許せないという考えで、かなり自己中心的な意見といえる。

（ブログ・ミルクたっぷりの酒 2010年11月11日公開）

大東亜戦争を「アジア解放戦争だ」「自存自衛のための戦争だ」と言って肯定している連中はただの馬鹿

大東亜戦争がアジア解放のための戦争だというのは、戦争を正当化するためのただの口実に過ぎないが、仮に戦争の目的が「欧米諸国に植民地支配されているインドや東南アジアの国を、その植民地支配から解放すること」であったとしても、この戦争を肯定している日本人がただの馬鹿であることには変わりはない。

大東亜戦争の結果なにが生じたのか。日本はアメリカに占領され、形式的に独立を達成したあとも、実質的にはアメリカの従属国になってしまったのである。よその国を植民地支配から解放するといいいながら、当の日本が戦争を仕掛けた国の従属国になってしまったのだから世話はない。

大東亜戦争は自存自衛の戦争だという主張も同様である。戦争の目的が自存自衛のためであったのなら、その目的を達成できたのか……。否。戦争を仕掛けた相手国に占領され、その従属国になるという自存自衛とは正反対の結果をもたらしただけである。

では自存自衛とやらの戦争を行わなければどうなっていたのか。経済的に苦しい状態は何年も続いただろうが、少なくとも外国に占領され、その従属国に陥るといった状況は避けられただろう。

自国の自立や独立になによりもの価値をおいている人間ならば、日本がアメリカの従属国になるという結果をもたらした戦争を行った政治指導者たちは、真っ先に批判しなければならないだろう。

ところが戦後日本で右翼や保守を自称している連中は、日本をアメリカの従属状態に陥らせた戦争を行った指導者たちを批判するどころか、戦争の目的が正しかったからと言って大東亜戦争を肯定・擁護・正当化しているのだから救いようがない。

まあ、心の底では日本がアメリカの従属状態に陥ったことを喜んでいるのだとしたら、極めて理にかなった行為だけれどね。

(ブログ・ミルクたっぷりの酒 2011年1月16日公開)

「太平洋戦争」と「戦後民主主義」をめぐる言説のねじれ

ステレオタイプの右派は「太平洋戦争」を肯定・擁護し、「戦後民主主義」を否定・批判する。一方、ステレオタイプの左派は「太平洋戦争」を否定・批判し、「戦後民主主義」を肯定・擁護する。

戦後の憲法、政治体制は占領軍の力があつたからこそ実現できたと言えるだろう。もし太平洋戦争を行わず、アメリカに占領されることがなければ、基本的には明治憲法、大日本帝国の政治体制が続いていただろう。時代の経過に伴い多少は憲法や政治制度に改良が加えられたかもしれないが、革命でもおきない限り現在のような憲法・政治制度を日本人自身の力でつくりだすことはできなかつただろう。

ステレオタイプの右派・保守的な価値観をもっている人たちは、「戦後民主主義」を否定したのであれば、その前に「太平洋戦争」を否定すべきだろう。連合国相手に勝算の少ない戦争を行わなければ、アメリカに占領されることもなく、占領軍の力を背景にして現在の憲法や政治制度が成立することもなかつたのだから。

ステレオタイプの左派は「太平洋戦争」を否定しているが、もし「太平洋戦争」を行わずアメリカに占領されなければ、自分たちが望むような憲法や政治制度を自分たちの力だけでつくることはできなかつただろう。

右派と左派の政治的力関係を比べれば、圧倒的に右派の方が強い。国民の政治意識も、左派・リベラル的な価値観をもっている人たちよりは、右派・保守的な価値観をもっている人の方が多数派だろう。

戦後の思想・言論の世界では左派的な思想・価値観が主流となったが、それは日本が戦争に負けたからかもしれない。もし敗戦という経験をしなかつたら、学界もマスメディアも右派・保守派が主流・多数派であり、左派・リベラル派は少数派であつたかもしれない。治安維持法が廃止されずそのまま存続していたら、民主主義的な政治制度を望む自由主義者たちが弾圧される時代が続いていたかもしれない。

(ブログ・ミルクたっぷりの酒 2011年1月17日公開)

「戦前・戦後」と「戦前・戦中・戦後」

日本の近現代史の（ジャーナリズム的な）時代区分には「戦前・戦後」という区分と「戦前・戦中・戦後」という区分があるが。

前者の場合、1945年を境にそれ以前を戦前、それ以後を戦後と呼んでいるが、戦前と戦後の区切りを1945年のどの時点に設定しているのだろう。

一般的には8月15日を境にしてそれ以前を戦前、それ以後を戦後と呼んでいると思うが、正式に戦争が終了したのは9月2日だという意見もあるようだし……。

後者の場合、戦前と戦中をどの年で区切っているのだろう。

十五年戦争的な考えにたち満州事変勃発後の1931年以後を戦中としているのだろうか。その場合、満州事変から日中戦争開始までの期間も戦中（戦時中）といえるのだろうか。

あるいは日中戦争開始の1937年以降を戦中と呼んでいるのだろうか。太平洋戦争が始まった1941年以後を戦中と呼んでいる人はいないような気がするので、1931年以降戦中説と1937年以降戦中説の2つの考え方があるのかもしれない。

「戦前・戦中・戦後」という呼び方はここ20年位の間を目にするようになった（自分が目にしていないだけで、それ以前から使われていたのかもしれない）。

80年代までは「戦前・戦後」という呼び方が一般的だったこともあり、どうも「戦前・戦中・戦後」という言い方には今一つなじめない。いつから戦中になったのかについて明確な定義があるようにもみえないし。

戦後という言い方がはやくなくなって欲しいと思っている人も結構いるような気もするが、戦後という言葉は、太平洋戦争終了後に確立された社会の在り方を総体として表している言葉なので、大きな制度変革が起こるか再び戦争に突入するといったことがなければなくならないような気もする。（戦後の社会システムは、太平洋戦争中に確立したシステムが継続されているという意見もあるけれど、一般的には戦前と戦後の連続性よりも断続性のほうがつよく意識されているだろう。）

団塊ジュニアと呼ばれている1970年代以降に生まれた人たちが、自分たちが生きてきた時代が戦後と呼ばれてきたことに対してどのような考えをもっているのかは知らない（色々な考えがあるだろうけれど）。

○現在の歴史的状況

2011年3月11日以降、（多分御厨貴の造語だと思うが）災後という言葉もちらほらとみかけるが、この言葉が戦後という呼称に代わるかは現時点では不明。

言葉は、その言葉が何を意味しているかだけでなく、語感（音の響きやリズム、イメージなど）や字面（文字表記したときのイメージなど）も大事なので、自分には災後という言葉は語呂が悪いので広く流通するようには思えない。

また災後という言葉を使用する人たちは、今回の大災害・原発事故によって戦後長く続いてきた社会の在り方（制度やシステム）が変化する、あるいは変化させなければいけないと考えてい

る人が多いような気がする。

これからの社会・歴史がどのようなものになるかは、（運命論・決定論的な考えに立つのであれば）人々が今後どのような動きをするかによって決まってくるが、大体次のケースが予想される。

1・「なにも変わらない」説

・現在の社会の在り方が多少の変化はあっても大きくは変わらずに続いていく。

2・「歴史の転換」説

・社会の在り方に大きな変化が生じる。

a 動乱・混乱説 ・幕末以来の内乱状態に陥る。

aの(1) 国家崩壊・分裂説 ー内乱の收拾がつかず、そのまま現在の国家が崩壊する。紛争状態が続き無政府状態が続くケースといくつかの小国家に分裂するケースが考えられる。

aの(2) 制度・システム転換説 ー内乱状態に收拾が付き、その後、新しい制度・システムが構築される。

b 制度・システム転換説 ー内乱状態には陥らず、平和的な方法で新しい制度・システムが構築される。

人々の行動は経済状況に大きく左右されるから（ただし「経済決定論」ではない）、現実の歴史・社会がどのようなようになるかは経済情勢がどうなるかによっても変わってくる。

また対外関係・国際情勢にも大きく左右されるから、外国がどのような動きをするか、外国とどのような関わりをもつかによっても変わってくる。

右翼的な考えをもつ人たちのなかには、「このままでは日本は外国に侵略されてしまう」と危機意識のみを募らせている人がけっこういる。現時点ではこういった主張は妄想に近いが、おこりうる最悪のケースも想定し、そうならないよう細心の注意を払うことも必要ではある。

ただし「憲法9条を改正して軍事力を強化」する日本の行為が、逆に外国の日本に対する敵対的行為を招く場合もあるから、ヒステリックになってキャンキャン吠えているだけの右翼勢力は、政府の冷静な対応力を狂わせる危険要因にすぎないんだけどね。（今の政権には冷静な対応力がない、という批判はその通りだろうけれど。）

（ブログ・ミルクたっぷりの酒 2011年8月2日公開）

雑文集－歴史と戦争

<http://p.booklog.jp/book/7873>

著者：小野ユージン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/onoeugene/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/7873>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ